

## 仮定条件句末形式出自の助詞について : デモ・ナリ トモの意味機能変化

矢毛, 達之  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9402>

---

出版情報 : 語文研究. 84, pp.28-38, 1997-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 仮定条件句末形式出自の助詞について

——デモ・ナリトモの意味機能変化——

矢 毛 達 之

## 内 容

- 一 はじめに
- 二 中世末期のデモ
- 三 嘶本・近松のデモ
- 四 デモとナリトモ
- 五 意味機能の移行
- 六 おわりに

### 一 はじめに

現代語の文中にあらわれるデモには、

1) そんなことは子供でも知っている。

の場合の様に、もともと仮定条件の句末を示す形式であつて、断定の助動詞の連用形＋係助詞モと分析することが出来、「タトエ…デアッテモ」という風な意味を有するものと、

2) 散歩にでも行こうか。

の場合の様に、1)とは異なり「タトエ…デアッテモ」などという意味を有するとは考えられないものがある。

2)のデモの意味は、「例エバ…カ何カ」という風になる。つまり、考えられるものの中から一つを例示的にとりあげるといふ「上接の語にある意味を添えて<sup>\*1</sup>だけ」のものであつて、また文の叙述内容について見ると、2)のデモが用いられる文は、勧誘・命令・意志・条件などのいわゆる非確言性のもの(ただし、従属句はこの限りではない)に限られる。これらのことから、2)の様な用法のデモは一語の助詞と考えられる。<sup>\*2,3)</sup>

ただ、この様に現代語でのおおの異なつた働きをするデモが併存するまで、史的にはどういふ変遷があつたのかについては、意外に明らかにされていない。

そこで本稿では、これらデモの異なつた用法があらわれ、

次第に定着していくとされる時期の中世末、近世期に注目して、デモがどの様にして現代語に繋がる意味を有するに至ったのかを考察する。その際注目するのは、2) の様なデモの例が時的的に1) の様なデモの例に後れてあらわれる事実と、また2) の様なデモが1) の様なデモから生じた用法であることとの二つである。さらに、デモ以前から存し、デモと同じく仮定条件句末を示す形式から助詞化したもので、断定の助動詞をその成り立ちに持つナリトモの変遷を絡めて論じること、助詞の意味機能の変遷の類型についても考えることとする。検討に用いる主な文献資料としては、抄物・狂言・嘶本・近松の世話物浄瑠璃などがある。

## 二 中世末期のデモ

今のところ、デモの例が見出せる文献は、中世末期のものまで遡るようである。その、中世末期の文献には、次の様なデモの例があらわれる。

- 3) 慶恩ハハヤイ者テ・・馬テモエリツカヌツ  
(蒙求抄・<sup>\*4</sup>149オ)
- 4) 一單ノ食テモ知レハ足ヨイソ  
(蒙求抄・<sup>\*4</sup>137ウ)
- 5) イカナル天子ノ手カキテモ自筆テハナイソ  
(四河入海・<sup>\*5</sup>1ノ14ウ)
- 6) それがしが身でもせうやうもなひ

- 7) 此方も少々ならば、何しに深からん物でも拵いて進じよう  
(捷解新語・<sup>\*7</sup>525)
- 8) 9) 人でも馬牛でも、何として堪りまるせうか  
(捷解新語・<sup>\*6</sup>376―3)

これらの例におけるデモは、全て「タトエ：テアツテモ」という風な意味にとることが出来よう。例えば、3) の例は、「たとえ馬であっても追いつくことが出来ない」、また6) の例などは「たとえ私の身であってもすべきようがない」という様に言い換えることが可能であると考えられる。少なくとも、これらの例におけるデモを、「例エバ：カ何カ」と言い換えることには無理がある。

つまり、中世末期の文献中にあらわれるデモの例は仮定の条件句末を示していると考えられる。これらの例のデモにおいては、デの断定性が生きていると考えることが出来、現代語に照らした場合1) の例により近く、2) の様な用法は少なくとも未だ熟していないようである。<sup>\*8</sup>なお、これら中世末期のデモの例は、その直接の前身を、

- 10) やい／＼少にてもそにはなひか  
(虎明本・よねいち、下98―7)
- などの様な例に見られるニテモに求めることが出来る。

### 三 喃本・近松のデモ

前項では、中世末期のデモが仮定の条件句末を示すものであって、現代語の1)の用法により近いものであると思われることを述べた。このことから、「一 はじめに」で述べたデモの二つの用法には、おのおのの発生の時期に遅速があるのでは無いか、ということが考えられる。

ところで、やや時期を下った近世(一七〇〇年前後)の文献である喃本や近松の世話物浄瑠璃には、中世末期とは異なり、「助動詞の連用形+モ」とは分析し難いと思われる例が少なからず見出される。以下に、その例を年代順に掲げる。

#### ・喃本の例

11) こんやハなつがふところへでもはいりてねませうと云て(正直咄大鏡へ貞享四(一六八七)年刊)五278—上17、去人↓友達)

12) 用事に付、江戸へいくが、其の方の腰より上へ、言伝でもしられんかと尋けれハ(軽口ひやう金房へ元禄(一六八八)一七〇四)頃刊)六276—下1、近所の衆↓腰より下)

13) 芝居はてければむなしくかへるもほいなし。見せ物でもミンと小芝居へ立よりしに(初音草喃大鑑へ元禄一一(一六九八)年刊)六170—下4)

14) 久七、やどばいりして、だんなへゆきければ、だんな申さるゝハ、なんと久七。あきないでもするか(軽口はなしとりへ享保一二(一七二七)年刊)七171—下13)

15) 行水でもさせて、つれて出よ。(軽口福おかしへ元文5年(一七四〇)刊)八29—上14、亭主↓内儀)

16) んの下にぬす人でもゐて、それがとりはづしたものでござんしよ(軽口若夷へ寛保二(一七四二)年刊)八90—下9、女房↓夫)

これらの例の内、11)のデモは「タトエなつ(人名)の懐へデアッテモ入って」ととるのは困難であって、むしろ「考エラレル入りドコロノウチカラ例エバ)なつの懐へ」と考えるべきと思われる。また、13)の例は「タトエ見せ物デアッテモ見よう」では無く、「例エバ見せ物カ何カ見よう」という風に言い換えてみる方が文意が通る。他の例も、同じ様に考えて差し支えないと思われる。つまり、これら11)と16)の例では、デモは「タトエミデアッテモ」という風な意味を持たず、むしろ考えられるものの中から一つを例示する機能のみを担っている訳である。ここからすると、既に喃本では、「一はじめに」で述べた現代語の2)の例と同じ意味を持つデモがあらわれているようである。

また、近松の世話物浄瑠璃でも、喃本の例と同様なデモがあらわれている。以下に、その例を年代順に掲げる。

17) それお盆でも持て来いやい。父様はお留主か(堀川波

鼓〈宝永四（一七〇七）年初演・以下同じ〉42—5、お藤↓下女〉

18) あらけなき打擲叔母様目でもまうたらば。何と言訳なされん  
（堀川波鼓51—9、文六↓お種）

19) 20) 小女郎。そなたのお敵松坂の七二は何として見えぬぞ。口舌でもしやったか。梯子の下のこそくが過ぎて気色でも悪いか。

（丹波與作〈宝永五（一七〇八）年〉104—11、詞）  
21) ハア、余所には嫁入が有るさうな。こちや洗足でもいたしませう。（五十年忌歌念仏〈宝永六（一七〇九）年〉138—8、清十郎〈独言〉）

22) 此方は腰をお引きなさるゝが疝気でも起ったか。（鑓の権三〈享保2（一七一七）年〉261—1、権三↓伴之丞）

23) 24) 怪我でもさするか数寄屋の壁に。疵でもついたらなんとする。（鑓の権三262—1・2、母おさる↓虎次郎）  
25) 祖父様へ行て大学でも読習や。（鑓の権三262—9、母おさる↓虎次郎）

26) もし人が起合うても女小者。口へ砂でも頬張らせ息ほねを上げさすな。（鑓の権三271—1、伴之丞↓下人）

27) 此のお姿は親御様の御勘気でも受けてのことか。（博多小女郎波枕〈享保三（一七一八）年〉330—9、小女郎↓惣七）

28) 端の間へ出て行燈でも見て気を晴らさう。サアござれ

（心中天の網島〈享保五（一七二〇）年〉363—7、孫右衛門↓小春）

29) おのれまあくゝ大事の子を怪我でもあつたらぶち殺すと  
（心中天の網島369—11、おさん↓三五郎）

30) ふと鞘走って怪我でもして。血を見れば殿の御代参叶はず。（女殺油地獄〈享保六（一七二二）年〉398—2、小栗↓森右衛門）

31) 年寄った父様目でも眩うたら。それはくゝ聞く事ぢやないぞ  
（女殺油地獄408—9、おかち↓與兵衛）  
32) さっぱりと肌の物でも買ひをれ

（女殺油地獄415—2、徳兵衛↓お吉）  
33) 男ども女子ども誰ぞお茶でも上げぬか（心中宵庚申〈享保七（一七二二）年〉446—6、半兵衛）

これらの例でも、デモは「…デアッテモ」という意味で用いられているとは考え難く、嘶本の例と同様に「例エバ…カ何カ」という意味を担っているところをべきである。つまり、近松の世話物浄瑠璃においても、デモの例には既に現代語（2）の例参照）と同じ意味を有するものがあらわれているのである。

ここで、以上掲げてきた嘶本・近松の例を通じて、窺われる特徴を述べる。

まず、文体面では、13）の例（不明）を除いて全例が会話文中にあらわれている。これは、現代語で2）の類のデモが

多く比較的にくだけた会話の中で用いられることも関連し  
そうである。

次に、例文の叙述内容を見ると、従属句内のものを除いて  
勧誘・命令・意志など非確言性のものに限られているよう  
であり、「一 はじめに」で述べた現代語の②の用法と同じ様  
に考えることが出来よう。

さらに、ここで重要と思われるのは、近松の18)・24)・  
29)・31)の様に、「:デモ:タラ」という仮定条件句内でデ  
モが使われている例が見えることである。中世末期や、また  
現代語の①の例に見られる様なデモは、それ自体で「タト  
エ:デアッテモ」という条件を表すと考えられる。<sup>34)</sup>つまり、  
もともと「:タラ」という仮定条件句の中には入ることが無  
い。それが、ここで19)などの様に用いられているのは、デ  
モが中世末期の例とは異なっていることを示す。

#### 四 デモとナリトモ

「二」では、近世の一七〇〇年頃には、デモが「タトエ:デ  
アッテモ」という風な意味を持たず、現代語の②の例と同  
じ様に用いられた例があらわれることを述べた。

また、「二」では、中世末期のデモが、現代語の①の例の  
用法により近いものであると思われることを述べた。このこ  
とから、「一 はじめに」で述べたデモの二つの用法には、そ

れらの発生の時期に遅速があるのでは無いか、ということが  
考えられる。さらに言えば、①の類の用法から、何らかの  
理由で新たに②の類の用法が発生したと仮定出来そうであ  
る。

実際、そのように仮定することで、デモの二つの用法が並  
立していく経緯が説明しやすくなると思われる。次に述べる  
様に、デモと同じく仮定の条件句末を示す形式であったもの  
で、後には単なる例示の機能をより強く担うこととなった助  
詞にナリトモが挙げられる事実も、この仮定を裏付ける。

言うまでもなく、ナリトモの組成は断定の助動詞ナリの終  
止形+接続助動詞トモである。ナリトモという語連接の例は、  
次に掲げる様に既に上代・中古期から見え、体言に直接した  
ものが多い。<sup>35)</sup>

34) ちよろづの軍なりとも (奈利友) 言挙げせず取りて来  
ぬべき男と思ふ (万葉集・九七二)

35) いみじき道なりとも、おもむきがたく覚え給ふ

(源氏物語・紅葉賀、一253—1)

ところで、確かにこれらの例ではナリトモという語連接が見  
出されるが、全て逆接の仮定条件句末に用いられている。つ  
まり、上代・中古期のナリトモは、断定の助動詞ナリに接続  
助動詞トモが接した形式、いわば二語(ナリ+トモ)と考えて  
良いと思われる。意味としては「タトエ:デアッテモ」とい  
う風に解釈することが出来よう。このようなナリトモは、中

世前期にも以下の例の様に引き続いて用いられている。

36) いみじきかたき物忌なりとも、ほそめにあけて入れ給へ  
(宇治拾遺物語・299—11)

37) 親の敵なれば、一人なりとも、平家をねらひてうたんと思ふぞ  
(平治物語・267—13)

38) 設日本国ノ外ナル新羅高麗ナリトモ、ヨクレ奉ベカラズト、異口同音ニ申ケレバ  
(延慶本平家物語・下98—5)

中世後期になると、ナリトモは体言に直接するもの他に、次に掲げる様に種々の助詞に下接したのもも多くあらわれる。

39) 仙境ノ真君殿へ我夢中ニナリトモ至テアラハ

(四河入海・二二ノ三三才)

40) 世界ノコレホトニヒロイセカイニトチエナリトモテハ  
セイテ  
(玉塵抄・五687—8)

41) なんとぞして今一度はかない筆の跡をなりとも奉つて、御おとづれを聞かうとこそ思へと、言はれたれば

(天草版平家物語・61—21)

42) 右馬、先をも略してなりともおかたりあれ

(天草版平家物語・335—5)

さらに、意味の上でも、以下に掲げる『虎明本狂言』の例の様に、「タトエ：デアッテモ」などと言うよりは「例エバ：デモ」という風に解釈する方が納得しやすいものが目立って

くる。

43) 此福はやらはずはなるまひが、何とせうぞ、にくさもにくしなぶつてなりともやらふ

(くらままり・中67—11、太郎冠者独言)  
44) いや中々、さやうの事もぞんぜんんだ、それならば、さゝゑなりとももたせてまいらう物を

(ほねかわ・中375—2、檀家一↓住持)

45) 御ふしんをぞんじたらは、まいつてかべしたじなりともいたさう物を (八句連歌・下102—14、借手↓貸手)

また、狂言記類や近松の世話物浄瑠璃でも、以下の例の様に、ナリトモが上接語句を単に例示しているかに見えるものが見出される。

46) 鯉をこそ持てまいらずとも。どぢやう成共。はへにても。持て参らふ  
(続狂言記・鱸包丁二32才8)

47) (女) 此上は川へなりとも。身をなげてしなふ(▲又女) わらはもじがいしてなり共。しにませふ(といふてなげく)(▲シテ) それ程に思やらば。しんでいらざることつむりをすつてなりとも念仏を申て。おとむらやれ

(続狂言記・六人僧三31才10—13)

48) 此祖父子も弓の者になりとも、鉄砲の者になり、出ふと思てすは  
(狂言記拾遺・枕物狂ひ一34ウ12)

49) さらにと経を取置いて手鼓なりとも打ったがよい  
(堀川波鼓61—3、下女↓彦九郎)

50) 今夜はどこに泊らうぞ。ハテ三柄が端か油掛か。そろ  
く京へなりとも上らうと

(鐘の権三287—1、不明)

この様に、ナリトモの場合においても、条件句末を示す形式として「タトエ：デアッテモ」という風な意味のみを担っていた段階から、時代が下るにつれて、単なる例示の機能により近づいた例を多く拾うことが出来る訳である。この際、ナリトモのあらわれている文の陳述内容が、全て非確言性のものであることは注意される。

## 五 意味機能の移行

前項までで、デモ・ナリトモが似通った意味機能の変遷を辿ったのでは無いか、という仮定を行った。では、この仮定は国語史の上からどの様に説明することが出来るだろうか。

デモやナリトモなどの助詞化についての考察は、従来あまりなされていなかったようである。管見に入ったものには、まず此島正年氏の論がある。<sup>[\*17]</sup>此島氏は、「お氣にいらざア狗にでも猫にでも遣るがいい」(清談若緑・二三)の様な、デモ・ナリトモが一文中に重複してあらわれる例を重く見られ、「一括して言えば「何にでも」と言うべきところを、不定詞「何」を個々の具体例に分解して「狗にでも猫にでも」と表現したものであるが、その具体例の方に表現の重心が移ると、

例示の用法が生ずるわけである」とされた。<sup>[\*18]</sup>しかし、重複の片方が落ちると何故デモ・ナリトモの例示性が強まるのか、また、その過程も今一つ明確でない様に思われる。

ところで、山口堯二氏は、ナリトモの意味機能の変化が中世に起こったことについて、

その原因の一つは、「なりとも」に限らず、逆接仮定条件の示せる帰結の保証性が、上接語を不定化・例示化する働きを持つことよって、最低限度の志向対象であることを示す一面をそなえていた古代語の副助詞「だに」と類似性を持ちえた点に求められよう。「なりとも」はそれだけ既成の副助詞の枠組みに含まれることが容易だったのである。

と述べておられる。<sup>[\*19]</sup>ここで、ナリトモ(矢毛註、ひいては「逆接仮定条件」にあずかるデモ)とタニとの類似が指摘されていることに注意したい。「最低限度の志向対象」とは、「鳴く鳥の声だに」(谷)聞かば何か嘆かむ」(万葉集・二二三九)の例の様に、「セメテ：ダケデモ」という風に解釈されるもので、述語句には多く非確言性の陳述内容を持つものが来る。

この「最低限度の志向対象」を示す役割がデモやナリトモに備わっていたとすれば、これらの形式が一語化していく過程が裏付けられることになる。実際、その様なデモ・ナリトモの例が中世末〜近世前期にかけて見出される。

中世末期の『虎明本狂言』や狂言記の諸篇の中には、意味



の上で単に現代語の1)の例のデモと同断であるとのみは言い切れない様な例が見える。以下に、それらの例を掲げて検討する。

『虎明本狂言』では二三例のデモが数えられるが、6)の例の様に「タトエ：デアツテモ」という意味を持った表現に用いられている。この内、次に掲げる、

51) これ御ざると、かねてぞんじたらは、路次でお茶なりと申さう物を、さうたんに申いつて、おちやでも申さいで、おのこりおほい (餅酒・上44―3)

という例などは、現代語で「お茶でも飲むか」などという、「一 はじめに」に掲げた2)の例との関係を想起させるが、やはり「色々オモテナシスベキトコロナニ、セメテ」お茶ダケデモ(それをお出し)申し上げずに」という風に解釈出来そうである。

また、<sup>〔\*21〕</sup>『狂言記』正篇(万治三(一六六〇)年刊)の、

52) さらばくも。かう帰りまする ▲おい はて。御茶でも。まいりませいて (こんくわい・二七オ2)

という例は、35)の『虎明本狂言』の例と同断であろう。同じく正篇には、

53) 此中は。お人でもしんぜぬが。なに事も御さらぬか (ぬけがら・一13オ4)

という例が見える。これは「との」が「くわしや」に、さる

所へのご機嫌伺いを言付ける際のせりふであるが、その解釈としては、「色々考えられる中で、セメテ最小限他の人を差し向けるということダケデモすべきところ、それもしておりませんが、お変わりございせんか」とする方が、無理に1)か2)のどちらかの類に当てはめるよりも良いと思われる。<sup>〔\*22〕</sup>次に、『続狂言記』(元禄一三(一七〇〇)年刊)の、

54) なふく何と湯水でものみたふないか。やあ草臥た。よふ寝らるゝ (磁石・五29オ6)

の様な例も判断に迷うが、やはりこれも、話者が相手に、「あなたにはくたびれているようだが」セメテ湯水ダケデモ飲みたくはないかと尋ねているようである。

さらに、近松の世話物浄瑠璃においても、微妙な意味を有するデモの例が見える。まず、

55) ア措きやく。お大名の宮仕琴の組でもうたはいで。誰に習うてはでな歌姫様などに教やんな。

(丹波興作95―6、滋野井↓小姓衆) という例は、姫の乳母のことばとして、大名のお屋敷へ仕える者が琴の組歌(というその環境にふさわしい音楽)を歌うということをせずに、その場にふさわしく無い「はでな」歌を姫に教える様な行為を戒めているくだりであるが、その解釈として、「(タトエソレガ)琴の組歌デアツテモ歌わずに」とすると無理がある。しかし、「セメテ例エバ琴の組歌を歌うことダケデモして欲しいのに、それもせずに」と考えれば納

得がいく。次に、

56) 此方の連合にも詞こそは交さずとも。ちよつと顔でも見たいが。

(冥途の飛脚〈正徳元(一七一一年)年〉186—9、孫右衛門 ↓梅川)

この例は、前句で「言葉こそ交わすことは無いにしても」と条件を明示し、後句「ちよつと(例エバ)顔カ何カを見たいのだが」と言う風に、現代語の2)の例と同様に考えることもできる。ただ、「(セメテ)ちよつと顔ダケデモ見たいのだが」という風に、デモが「最低限度の志向対象」を明示する役割を担っていると見るのも可能である。

また、ナリトモについても、次の様な例が見られる。『虎明本狂言』の、

57) やれくそなたはりちぎな人じや、其分ならば人なりともおこひておきやらひで、自身のお出はかしこまりぞんずる

(すゞきばうちやう・下115—6、伯父 ↓甥)  
という例は、「セメテ他の人ダケデモよこしてくれば良かったものを、そうして置かれずに、ご自身のお出では…」と言う風に解釈される。次に、『狂言記』正篇の、

58) 鬼になるならば。しやうをかゑてなりとも。ならいで。いきながら。鬼になると事は。なにの因果で御さるぞ。

(抜殻・一15才13)

という例は、「鬼になるならば、セメテ生まれ変わってデモなるべきものを、それもせず」と言う風に考えた方が理解しやすい。

以上の様なデモ・ナリトモの例は、「タトエ：デアッテモ」という論理的な関係を示すと言うよりは「セメテ：ダケデモ」というより情意的な意味を担っていると考えられる。さらに言えば、この様な「最低限度の志向対象」を示す機能のより強いデモ・ナリトモを現代語の1)の例と2)の例との間に置いて考えることで、仮定の条件句末を示す形式であったものが一語化して、単なる例示の機能を有する助詞となるに至った過程がより無理無く説明できると思われる。

なお、助詞デモ・ナリトモに先立つ存在として、やはり考えられるものの中から一つを例示的にとりあげる機能を有し、しかも非確言性の会話文中に、

・さだめて生うをがたんとあらふ、それをくはせて、虫ばしおこさせてはと思て (条件句)

(虎明本狂言・あびす毘沙門、夷 ↓毘沙門)  
・飢テハアハレ何カナクワウ渴シテハ酒カナ飲ト思フ (意志) (四河入海・八ノ一)

などと用いられることの多かったバシやガナが中世末期を最後に衰退していったことも、新しいデモ・ナリトモの用法が既存の助詞の体系に入り込むのに有利に働いたと思われる。

ともあれ、助詞デモの用法は、以下に掲げる近世中期以降

における例、

59) 一座の座禅をもつとめ、一遍の経をもよみ、香花でもとつて、跡をとふが、親には孝行、子には慈悲といふものじやわひの

(盤珪禪師御示聞書〔<sup>\*24</sup>宝曆七(一七五七)年刊〕・一六)

60) (アド) ……某に一礼をせずは其すをうらす事ではないぞ。(シテ) 夫には又子細<sup>[\*25]</sup>でも有るか。(アド) 中く、子細が有る。(虎寛本狂言・すはじかみ)

61) 62) おれも水でも飲むべい。…此砂糖は糠でもまぜやアしねえか (浮世風呂・四上)

などを経て「すっかり熟し」<sup>[\*26]</sup>ていくこととなる。しかし、ナリトモの方は近世期には用いられなくなっていく。これには、もともとこの語を形作っていた助動詞ナリ・助詞トモの両者が共に古い形式となり、衰退したこともあずかつていう。ただし、ナリトモの後身として、

63) これで御ざると、かねてぞんじたらは、路次でお茶なりと申さう物を、ざうたんに申いつて、おちやでも申さいで、おのこりおほい (前掲・餅酒)

64) 〳やいこひ、水なりとのませたらはとりかへせ(今まいり・上204—10、大名↓太郎冠者)(以上、『虎明本狂言』の様なモノ落ちたナリトや、さらに変化したナット・ナトの形が見られる訳である。

## 六 おわりに

以上、デモが元々有していた仮定の条件句末を示すという機能を無くして、むしろ単なる例示をのみ担う例があることを、中世末から近世にかけての文献に照らして検討し、デモと同様な変遷を辿ったと思われるナリトモの例とも併せて論じた。その結果、まとめとして次の様なことが言えるかと思う。

・現代語のデモ2)の用法の早い例は、近世一七〇〇年前後から見られる。

・デモ1)の用法からデモ2)の用法が生まれるまでの中世末〜近世前期に、中間的な用法として、「最低限度の志向対象」を示す役割を持ったデモの例が存した。

積み残した点は、全て今後の課題としたい。

### 註

\*1 明治書院『日本文法大辞典』・「でも(現代語)」の項(阪田雪子氏執筆)参照。

\*2 寺村秀夫氏『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版、平成三年など参照。

\*3 1)の様な用法のデモを一語の助詞と認めるかどうかについては議論がある。

- \* 4 『抄物大系』(勉誠社)によった。
- \* 5 『抄物資料集成』(清文堂)によった。
- \* 6 池田廣司・北原保雄氏『大藏虎明本狂言集の研究 本文篇上・中・下』(表現社)によった。
- \* 7 原刊本。京大国文学会編『三本対照捷解新語』によった。
- \* 8 此島正年氏『国語助詞の研究』(桜楓社、昭和四一年)では「自然二道ニテモアフテト存シテ」(四河入海・八)・「夕さり参って何とない事でも申して慰めませう」(天草版平家物語・四・第十一)を挙げておられる(三五頁)が、前者は格助詞ニテにモが下接したものと考えられ、また後者の例は「事ども」の誤り(原典ローマ字表記は「sotodomo」(一五九頁))である。小林賢次氏は「まったく副助詞化した、単なる例示の意味の「デモ」の例は、キリシタン文献にも虎明本にも見られないのである」(『日本語条件表現史の研究』二三八頁・ひつじ書房、平成八年)と述べておられる。
- \* 9 「嘶本大系」(東京堂出版)によった。
- \* 10 小学館『日本国語大辞典』では、本稿で言う②の用法の早いものとして「虎寛本狂言」(二七九)の例(後出・60)参照)を掲げているが、嘶本の例は、それから更に百年ほど遡ることになる。
- \* 11 ここで、デモの元々の出自(断定の助動詞を含む)が思い起こされる。
- \* 12 柏原司郎氏「なりとも」の助詞化する周辺」(此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢)桜楓社、昭和六三年)には、主として中世までのナリトモの例が多数挙げられている。
- \* 13 『源氏物語大成』(中央公論社)を参考にした。
- \* 14 北原保雄・小川栄一氏編『延慶本平家物語本文篇』(勉誠社)

- によった。
  - \* 15 註4に同じ。
  - \* 16 江口正弘氏『天草版平家物語対照本文及び総索引』(明治書院)によった。
  - \* 17 『国語助詞の研究』三五一―三五三頁参照。
  - \* 18 註17に同じ。
  - \* 19 『日本語接統法史論』一四七頁・和泉書院、平成八年参照。
  - \* 20 ナリトモとタニとの関連については、此島正年氏『国語助詞の研究』三五六頁にも記述がある。
  - \* 21 北原保雄・大倉浩氏『狂言記の研究』・北原保雄・小林賢次氏『続狂言記の研究』・北原保雄・吉見孝夫氏『狂言記拾遺の研究』(いずれも勉誠社)によった。
  - \* 22 岩波「新日本古典文学大系」の『狂言記』では、当該部分のデモについて、「か何か。近世に発達した副助詞。「なりとも」とも」と脚註を付す(一六頁)が、直ちに納得し難い。
  - \* 23 堀内武雄氏「特殊な助詞の研究 ―ばし・がに・づつ・がな―」(国文学 解釈と教材の研究)二二〇―二二、昭和四二年一月)・坂詰力治氏「室町時代における助詞「バシ」について」(『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂、平成五年)・佐藤宣男氏「助詞「がな」の変遷」(『藤女子大学国文学雑誌』一三、昭和四八年三月)など参照。
  - \* 24 岩波文庫『盤珪禪師語録』によった。
  - \* 25 岩波文庫本によった。
  - \* 26 堀田要治氏「でも(付 なりとも)」(『古典語現代語 助詞助動詞詳説』五四六頁・學燈社、昭和四四年)参照。
- ※用例の内、特に註記しなかったものの出典は、全て岩波「日本古典文学大系」によった。